

| | |
|----------|--|
| 氏 名 | 見越 綾子 |
| 学位の種類 | 博士(医学) |
| 学位記番号 | 第 7 4 5 号 |
| 認定課程名 | 防衛医科大学校医学教育部医学研究科 |
| 学位授与年月日 | 令和6年2月19日 |
| 論文題目 | MRI 検出率に影響を与える前立腺癌の病理組織学的特性の検討 |
| 審査担当専門委員 | (主査) 東 邦 大 学 教 授 堀 正 明 順 天 堂 大 学 教 授 鈴 木 祐 介 福 井 大 学 教 授 寺 田 直 樹 |

審 査 の 結 果 の 要 旨

多パラメトリック MRI (mpMRI) は前立腺癌、特に臨床的に重要な前立腺癌 (csPCa) の診断に用いられる。しかし、一部の癌は mpMRI で見逃されることがある (10-20%)。特に、予後不良因子である Gleason pattern (GP) 4 のサブタイプ、篩状腺管 (cribriform gland) や前立腺導管内癌 (IDC-P) における MRI 検出率に関しては、結論が出ていない状況である。申請者らは、MRI 検出可能な前立腺癌と MRI 検出困難な csPCa の病理組織学的評価、病理組織画像の半自動解析、放射線学的評価を行った。これは、術前に mpMRI を撮像し、その後根治的前立腺切除術 (radical prostatectomy [RP]) を受け、且つ術前補助ホルモン療法や放射線療法を受けていない 179 人を対象としている。

本研究により、前立腺癌において組織学的に cribriform gland 優位かどうかと MRI での臨床的に意義のある癌の検出率との間に有意な相関は認められなかったことが示された。また、病変内の「癌細胞の相対面積分率の増加」や「間質および管腔の相対面積分率の減少」が MRI による臨床的に意義のある癌の検出率と最も相関していた。病変内の前立腺導管内癌の有無や病変内に占める割合は、MRI 検出率と相関がなかった。単変量解析で有意差があった項目を対象とした多変量解析の結果では、オッズ比は、癌細胞の面積率が 1.10、管腔が 0.84 (いずれも $P < 0.001$) で有意であり、その他の因子に有意差は認められなかった。本研究による知見は、現状の MRI 撮像技術の改善に貢献し、より多くのサブタイプ前立腺癌を早期に検出できるようになることが期待される。また、これにより不必要な生検や治療の削減にもつながり、患者の QOL (生活の質) 向上に寄与することも期待される。よって、本論文の学術的価値は高く、博士 (医学) として合格と判定した。